

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第27号

目次

大学文書館の歩みに重ねて

伊藤 孝夫 2

公開資料紹介：学友会関係資料

西山 伸 3

朝鮮戦争下の京大学生運動と

『京大反戦平和詩集』

宇野田 尚哉 4

東京藝術大学のアーカイブズ

—活動報告と求められる将来像—

橋本 久美子 6

企画展紹介：京大経済学部創設と

河上肇たち

福家 崇洋 8

日誌 10

大学文書館の動き：

「米軍ビラ」をご寄贈いただきました

..... 11

人の動き 11

実現しなくてよかった？

—長期施設計画—

西山 伸 12



総合研究 8 号館（旧工学部 8 号館、1972 年竣工）

この時代の代表的な建築物である（関連記事 12 頁）。地下には京大生協の中央食堂が入っている。

大学文書館の歩みに重ねて

京都大学大学文書館長 伊藤 孝夫

江崎信芳前館長の御退任をうけて、この10月より私が大学文書館長に就任いたしました。平成12(2000)年の創設時から数えて5代目の館長ということになります。私自身は平成16(2004)年より文書館教授を兼任で務め、かねて文書館の運営に関与して参りましたが、今後は館長としての職責を負うこととなり、さらに気を引き締めその運営に取り組んでいきたいと存じます。

京都大学百年史編纂作業の完了時に、収集された資料を引き継ぎつつ、情報公開や公文書管理システムの一層の整備の必要に対応するため新たに設置された大学文書館は、現在では、平成23(2011)年施行の公文書管理法により国立大学法人・京都大学に明確に課せられる責務となった法人文書管理を担う中心施設となって、日々業務を遂行していることはご承知の通りかと思えます。

文書館が行う最も根幹となる業務として、保存期間が満了した法人文書のうち歴史資料として重要なものを特定歴史公文書として受け入れ、管理・公開を行うという活動があります。文書館には毎年、学内の事務本部・各部局からその年度で保存期間が満了した膨大な文書が移管されて来ます。この受入作業が完了すると、ひきつづき直ちに、これらを公開して閲覧に供することができるよう整理する作業が営々と行われることになります。また卒業生や元教職員などの京大関係者、関係団体所蔵の資料も積極的に受け入れ、やはり公開へ向けて整理作業が行われます。これらの作業は、資料の内容を正確に認識し文書群の構造を体系的に把握する能力、歴史学・アーカイブズ学等の高度な学識の裏付けによって初めて行われ得ることはいうまでもありません。文書館設置当初から専任教員としては、今や文書館の「化身」(1)のような西山伸教授(創設当時は助教授)のほか、2名の助教(創設当時は助手)が配されてこれらの業務を担ってきました。また、これらの資料を基礎とした研究成果の発表も専任教員の重要な活動です。西山教授の御業績はいわずもがな、この文書館での勤務で経験を積んだ歴代のあるいは現任の助教のうちから、第一線の研究者を輩出してきていることも、文書館が学術上

においてなしている貢献として自負するところです。さらに付け加えれば、時計台記念館内の歴史展示室の運営、京都大学の歴史に関するレクチュアや問い合わせへの回答等も文書館の業務として行ってきました。

以上、大急ぎで文書館の概要を紹介してみました。冒頭にも少し触れたように、私自身、文書館との関わりはかねてたいへん深いものがあります。文書館設置につながる動きの一つに、京都大学百年史編纂作業があったことは既述の通りですが、私はその執筆担当者の一人であり、西山教授は当時、助手として資料収集をはじめ編集全般に関わる仕事をしておられました。文書館設置への動きがいよいよ始まった当時、私自身は学内の運営委員の一人としてそれを見守る立場にとどまていましたが、この画期的な構想には心からの喝采を送っていました。「大学文書館だより」には、設置当時の雰囲気やうかがわせる記事がいくつもありますが、その1つ、平成14(2002)年の第2号には「こういう日が やっと来た - 京都大学大学文書館の成長を祈って -」という、寺崎昌男・東大名誉教授の文章が載せられています。また平成23(2011)年の第21号には、創設に関わる事務作業を担当された岸本佳典氏の回想「大学文書館創設の頃」という文章があります。いずれも、国立大学で初の本格的文書館の誕生に多くの方々が寄せた「熱い思い」を伝えています。

私が文書館兼任教授に就任したのは、初代・佐々木丞平館長のあとを藤井譲治館長が引き継がれた時です。佐々木先生のあとを受け御定年まで8年にわたって館長を務められた藤井先生はいわば「名館長」で、文書館運営の基礎をしっかりと固められましたが、その後、林信夫そして江崎信芳館長と、大学全体の事情を俯瞰できる広い視野をおもちの両先生には、大学を取り巻く変革の波の中での文書館の位置づけを明確に把握して舵を取っていただけました。こうして歴代館長を務められた各先生の名を挙げてみると、急に「小物」が大役を仰せつかった感は否めませんが、これまでの歩みを振り返り、あらためて文書館の将来に思いを馳せて、今後の取り組みへの思いを新たにするとところです。

公開資料紹介

学友会関係資料

京都大学大学文書館教授 西山 伸

大学文書館では、『学友会関係資料』と名づけた一連の資料群を公開している。

学友会とは、1913年に学内に設置された団体で、運動部や文化部を統轄していたほか、学内で各種の行事なども主催していた。しかし、その会長が京都帝国大学総長であったことから分かるように、戦後に置かれたような学生自治団体ではなく、教官・学生等の親睦団体であった。戦時中、大学・高等学校等の学友会（校友会）は国家の「新体制」に適合するよう改編を文部省から求められるが、それを受けて1941年同学会と改称するとともに、組織改編を行った。さらに戦後の1946年には同学会の名称のまま学生自治団体として生まれ変わっている。

本資料は、「学友会一件書類」というシリーズと、会計関係資料、およびその他の資料という三つのカテゴリーに分けることができる。「一件書類」は、いわば学友会の公文書であり、役員会関係、役員人事関係、諸許可関係、予算・決算関係、他機関との往復文書、といった資料が年度毎に1944年度まで綴じられている。会計関係資料には、各部毎の予算配当額を記した「歳出推算簿」、学生の会費納入状況を記録した「学友会費納入簿」等がある。また、その他の資料とは前二者のような簿冊の形態にまとまっていない資料類であり、日誌の類や戦後学生運動時のカンパに関する文書、1950年代・60年代の文化祭・11月祭のパンフレット等、文字通り雑多な構成となっている。

資料の点数は106点だが、「一件書類」には多くの文書が編綴されており、それらの文書は約4000件を数える。

本資料は学友会を理解する上での基本資料であり、運動部・文化部等の活動や、運動大会、園遊会等の諸行事、1920年代後半に左翼的学生によって展開された学友会改革運動等、戦前・戦中の学友会を取り巻く動向が浮び上がってくる資料群である。

また、こんな興味深い資料もある。

1929年6月11日、講演部は国家主義者として有名であった慶應義塾大学予科教授の蓑田胸喜を演者として招いた。しかし、講演およびその後の座談会の場で、蓑田は京大社会科学研究会のメンバーだった宇都宮徳馬・勝間田清一・水田三喜男らに少々攻撃されてしまう。この時の蓑田の怒りが当時講演部長だった滝川幸辰に向けられるようになり、滝川事件の遠因になったとの説もある。滝川の回想によると、蓑田の来演は滝川に事前の相談なしに決められ、「札つきの右翼」が講演することに「ハラがたったので、部長としてハンをおさなかった」と述べている（滝川幸辰『激流』河出書房新社、1963年、107頁）。

この回想が本当かどうか確かめようと、本資料中にある蓑田の講演に関する「教室借用ノ件伺」（識別番号：学友会17-23、ファイル番号MP70027）を見てみた。すると、講演部総務山岡操の名で、当時の新城新蔵総長宛に出されたこの文書の欄外右肩に「滝川幸辰」という印がちゃんと捺されているではないか（写真）。



これが形式的に捺されたものなのか、滝川の下承のもと捺されたのか不明だが、いろいろと想像をたくましくさせられる資料ではある。こうした資料を含む学友会関係資料を精査することによって、京大史の様々な側面がさらに明らかになっていくものと思われる。

朝鮮戦争下の京大学生運動と『京大反戦平和詩集』

大阪大学大学院文学研究科准教授 宇野田 尚哉

1 総合原爆展・天皇事件と『京大反戦平和詩集』

朝鮮戦争下における京都大学の学生の動きとしてふつう特筆されるのは、総合原爆展と天皇事件の2つであるだろう。総合原爆展とは、全学学生自治会同学会が主催するかたちで1951年7月14日から10日間京都駅前丸物百貨店（のちの近鉄百貨店）で開催された、日本最初の総合的な原爆展。多くの教員・学生の協力により視野が広く専門性も高い展示が実現し、丸木位里・赤松俊子の《原爆の図》第1～5部も出品され（第4・5部は初公開）、3万人もの入場者があった。天皇事件とは、昭和天皇が近畿巡幸の途上同年11月12日に京大を訪れた際、天皇一行を先導する新聞社の車が「君が代」を流したのに反発した学生たちのなかから「平和の歌」が歌われはじめ、押し合った学生が車の進路をふさぐにいったという事件。当日は逮捕者が出たりすることもなかったが、翌日以降新聞や政府からの批判が高まり、大学当局により同学会解散、同学会委員8名無期停学という処分が下された。松尾尊兌は、総合原爆展と天皇事件を取り上げたコラムで、「一九五一年の京大学生の動きは、朝鮮戦争・片面講和、そして逆コースへの一つの抵抗であった」と評しているが（松尾尊兌『集英社版日本の歴史21 国際国家への出発』1993年）、簡にして要を得た評価であるといえるだろう。

ここで紹介する『京大反戦平和詩集』は、後述するように総合原爆展や天皇事件とも深く関わっており、それらと連動した〈もう一つの抵抗〉として重要であるといつてよい。しかしながら、総合原爆展や天皇事件をめぐる回想のなかで言及されることはあっても、網羅的な資料収集や系統的な資料分析はいまだなされていない。中心的な担い手であった

豊田善次の回想（『高橋和巳の回想』構想社、1980年）には『京大反戦平和詩集』のことがかなり詳しく述べられているが、一次資料と照らし合わせながらの検討がやはり必要であるだろう。そこで、以下では、この小稿がきっかけとなって当事者の方々から資料や情報をお寄せいただけることを期待しつつ、初期的段階の研究報告をさせていただくこととしたい。

2 『京大反戦平和詩集』の創刊

『京大反戦平和詩集』は、朝鮮戦争勃発（1950年6月25日）の直後に創刊された。発行主体は共産党国際派系の学生組織京大反戦学生同盟。冒頭に置かれた6月27日付の「反戦平和詩出版にあたって」（豊田善次執筆）には、「戦争が詩人たちの上に重苦しくのしかかりはじめたとき、詩人の良心は戦争への抵抗をうたわずにはおれないだらう」、「われわれの反戦詩は、単に抽象的に平和を希求するていものではなく、平和をかちとる斗ひを通じてわれわれ自身の内部秩序の変革をめざすものだ」とある。この創刊号には、小松実（左京）や高橋和巳も寄稿していて興味深い。

ところで、当時新大阪新聞社の記者だった足立巻一は、『夕刊新大阪』に書いたこの創刊号の紹介記事（7月6日号掲載）がGHQの目に留まったために編集局長が呼び出され、自身も共産黨員ではない旨の誓約書を書かされたという（足立巻一『夕刊流星号』新潮社、1981年）。このエピソードは、占領下で反戦平和詩を書くとは占領軍からの圧力に抗しながら表現することにほかならなかったことを、よく示している。

3 原爆詩と天皇特集

『京大反戦平和詩集』第2号は、創刊号が

発行されてから1年近く経った1951年5月18日に発行された。発行主体は京大反戦詩グループ（第3号以降は京大反戦平和詩グループ）。第1号の執筆者のうち第2号以降にも名前が見えるのはわずか3分の1にすぎず、担い手が大きく変わっていることがわかる。

第2号の発行までに1年近くを要した背景としては、当時共産党の分裂と連動して全学連も分裂状態に陥っていたという事情が考えられる。翌6月には関西学連が国際派系の全学連中執の不信任案を可決しているが、そのような動きの中心だった京大にあって、『京大反戦平和詩集』の発行主体も主流派の線で再組織されたものと思われる。

第2号以降の『京大反戦平和詩集』で目につくのは、原爆詩と天皇特集である。第4号は1951年8月6日に発行されており、被爆6周年が意識されていて、戸田芳実「原爆展の声」などの作品が掲載されている。第5号（1951年10月15日）で意図された原爆展特集はうまく実現できなかったようであるが、それでも坪島葉一「ヒロシマの塵埃から」などの作品が掲載されている。第6号（1951年11月10日）・第7号（同20日）は、天皇の京大訪問（同12日）にあわせて発行された「天皇特集号」「続天皇特集号」。第1～5号は20～40頁のガリ刷りの冊子であったのに対し、この第6号・第7号は表裏1枚で詩ビラに近い形態となっている。

ここでこの時期に編まれた学生サークル詩のアンソロジー『日本学生詩集』（理論社、1953年）を見てみると、同書に収録された47人48作品のうち、5人6作品が京大反戦平和詩グループからで、1つのサークルとしては人数・作品数とも最大であり、当該期の学生サークル詩運動のなかでは京大反戦平和詩グループはもっとも有力な集団の1つであったことがわかる。ちなみに、同書に採録されている作品は、戸田芳実「原爆展の声」、同「ドラム缶とこども達」、あかし・ごろう「あいつはもう帰らない」、たけおか・ゆきはる「京都の学生たち」、島陽二「天皇列車」、前川享一「メーデー讃歌」で、なかでも島陽二「天

皇列車」は野間宏による解説のなかで高く評価されている。

『京大反戦平和詩集』がその後どうなったのかは、現段階ではよくわからない。私の手許には1952年6月に発行されたと思われる「破防法特集号」（発行年月日・号数表示なし、表裏1枚）のコピーがあるので、時局に対応して詩ビラに近い形態のものを発行し続けたものと思われるが、それはいつまで続いたのだろうか。今後の検討課題としたい。

4 あらためて、なぜいま『京大反戦平和詩集』なのか

近年、1950年代のサークル運動への関心が高まっている（たとえば2014年5月刊『週刊朝日百科 新発見!日本の歴史45 現代5』所載の「地図で見るサークル文化の勃興」参照）。朝鮮戦争や逆コースに対する文化運動というかたちをとった無名の人々の〈抵抗〉が関心を集めつつあるのである。私自身は、被爆地広島で詩人峠三吉を中心に発行されていた地域サークル詩誌『われらの詩』（1949～53年）を復刻紹介するといった仕事をしてきた（復刻版は三人社、2013年）。じつはその過程で、京大に学んだ広島の「島陽二」こと寺島洋一さんの知己を得、資料と情報を提供していただき、『京大反戦平和詩集』にも関心を持つようになったのである。

担い手の入れ替わりが激しいという事情にもよるのであろうが、学生サークル誌はまとまったかたちで残っている例が非常に少ない。そういう意味では、『京大反戦平和詩集』は、朝鮮戦争下の京大学生運動の研究にとっただけではなく、1950年代のサークル運動の研究にとっても、重要な拠り所でありうる。今後はそのような展望に立って研究を進めていきたいと考えている。この小稿を機縁として資料や情報をご提供いただけたら幸いである。

東京藝術大学のアーカイブズ —活動報告と求められる将来像—

東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター大学史史料室特任助教 橋本 久美子

総合芸術アーカイブのなかの大学アーカイブズ

東京藝術大学に5年プロジェクトの「総合芸術アーカイブセンター」が発足したのは平成23(2011)年5月です。同センターは、大学及び関連機関が所蔵する芸術資料を、デジタル技術をもって保存し、様々な形で活用していく方法を研究するために設立されました。扱う資料は文化財を含む芸術品、本学演奏会の録音録画、大学史文書、諸民族の楽器、書籍、授業・講演等多種多様な録音録画等で、次の四つのプロジェクトが連携をとり、研究を進めています。(1)美術情報(3Dデータ)研究、(2)音響・映像データ研究、(3)大学史文書史料研究、(4)情報システム研究。文書類、美術、音楽、映像、文化財、図書等のアーカイブを、教育研究への活用や外部企業等との連携も視野に入れる構想です。

筆者が勤務する大学史史料室も同センターの一つのプロジェクトとして活動しています。国内でも類例の少ない大学アーカイブズについてご報告し、皆様のご指導を仰ぐ次第です。

美術学部と音楽学部それぞれの史料室

東京藝術大学は音楽取調掛(明治12[1879]年)に始まる東京音楽学校と、図画取調掛(明治18[1885]年)に始まる東京美術学校を前身とする、音楽と美術の2学部からなる大学です。音楽取調掛創設から135年、美術学校と音楽学校の開校から127年を数えます。美術学部では50年前の昭和39(1964)年に教育資料編纂室が開室しました。東京美術学校時代の文書類や近現代美術教育に関する貴重資料を収集し、担当者が史料研究を行っています。先ごろ大学美術館で開催した展覧会「台湾の近代美術－青春群像(1895－1945)」と関連企画「台湾近代美術国際学術セミナー」等は、美術学校時代のアジア圏からの留学生に関する吉田千鶴子特別研究員の長年にわたる調査研究の結実とも言えるものです。一方、音楽学部にも初めて専用室が開室したのは平成21(2009)年です。専門性と公開性の高いアーカイブズを念頭に、資料収集と利用促進の

両立を図っています。筆者も東京音楽学校時代の人物、演奏会、教育内容を掘り起こし、校史授業を担当し、演奏会への提案も行っています。現場は全員非常勤(美:3名、音:2名)ですが、運営委員を交えた定期的な会議で、将来構想や法人文書の保存等について情報共有しています。

年史編纂からアーカイブズへ

『東京藝術大学百年史』全12巻の刊行(1987～2004)を終えた平成19(2007)年10月、両学部の編集担当者が大学史資料を扱う全学的・恒久的組織の必要について協議しました。翌年1月、研究推進室より資料室設置が提言され(大角欣矢室員より田淵俊夫研究担当理事へ)、大学史史料の整備に向けた組織的な動きが始まりました。現在は演奏会音源や彫刻の3Dデジタルアーカイブ等とともに活動する大学史史料室ですが、初めからこのような形を目指していたわけではありません。百年史編集資料と法人文書の保管・蓄積に向け、平成20年度学長裁量経費「東京藝術大学史の体制整備に向けた準備調査」の一環として寺崎昌男先生にご講演いただき、名古屋大学を初めとする大学アーカイブズの見学を開始しました。以後、最近まで国立では京都、東北、大阪、神戸、金沢、東京、東京外国語の各大学、私立芸術系では文化女子大学、武蔵野美術大学にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

平成21年度学長裁量経費「東京藝術大学における総合的なアーカイブズ戦略策定へ向けた基盤的研究」と併走して、新たに「総合芸術アーカイブのためのシステム構築」のWGが始まり、総合芸術アーカイブセンター設立に至りました。

大学史史料室(音楽側)の活動報告

大学アーカイブズが相次いで設立される時代に開室した大学史史料室は、始めからアーカイブズとして公開性と活用度を高めることを念頭に置いています。30人が学ぶ教室ぐらゐの史料室が、収納・閲覧・作業スペースを兼ねます。そこで自主的に展示を行い、利

用のニーズに応えると同時にニーズを掘り起こし、新研究を促進しています。

①史料室内の展示：平成22年、23年、26年の3回、9月の文化祭（藝祭）の3日間に展示を行い、各回とも約300名が来場されました。内容は、戦前の公文書類、寄贈資料（山田耕筰の自伝の自筆原稿、卒業生のアルバム、多様な書込や新聞記事の貼り込みのある楽譜や図書、明治の東京音楽学校演奏会でクラリネットを演奏した日露海戦の軍楽隊長が船上で撮影した写真や日記など）。先日の展示では研究成果として寄贈された論文、図書、CD、DVDも出展し、CDやDVDは順次再生しました。展示の趣旨は資料の一般公開と研究資料紹介にありますので、過半の資料は白手袋着用で捲ってご覧いただけるようにしました。展示後には閲覧希望を頂いています。

②室外での展示：(1)平成23(2011)年11-12月、上野公園内に移築保存された旧東京音楽学校奏楽堂展示室で演奏会と合わせて「ピアニスト小倉末子と東京音楽学校」展、(2)平成24(2012)年4-6月、大学美術館で美術側と「藝大の創成期と依頼事業」の共同展示を行いました。東京美術学校の依頼製作資料のそばに唱歌掛図、オルガン、東京音楽学校の依頼作曲に関する往復文書、楽譜を展示し、声楽科学生による復元演奏の音源が楽譜原資料と連動するiPadコンテンツを作成し、ヘッドホンで視聴できるようにしました。

③「東京音楽学校が作った"うた"」の公開：大学史史料室のホームページで「内地の歌」「仏印工兵隊」等7曲の復元演奏がお聴きになれます（<http://archive.geidai.ac.jp/597>）。東京音楽学校時代の依頼作曲関係の文書と楽譜と復元音源を合わせて公開する個性的なサイトは、原資料の解説、伴奏譜の作成、演奏、録音、著作権処理、そしてサイトの運用まで、アーカイブセンターの全プロジェクトが丸となって実現したものです。

④二つのシンポジウム

(1) 京都大学の西山伸教授にもご講演いただいた平成25年11月27日の総合芸術アーカイブセンター主催のシンポジウム「芸術・文化情報とオープンデータ・創造・研究と社会のためのアーカイブ」では、美術・音楽両学部の史料室の経緯、活用状況、学内部署との連携等を報告しました。(2) 本学が会場となったアート・ドキュメンテーション学会のシンポジウム（平成26年6月7-8日）では「日本近現代美術史・音楽史研究における東京藝術大学アーカイブズの役割」と題し、



藝祭2014（9月5日-7日）展示風景

音源と原資料のウェブ公開に至る著作権問題を報告。会場入口付近に、彫刻原物と3D出力品、演奏会映像コンテンツ、明治時代の文書綴など4プロジェクトで展示を構成しました。

大学史史料室（音楽側）の利用状況

平成25年度1年間に延べ67名が大学史史料室を利用されました。ここ3年ほどでデータ入力を終えた寄贈資料は個人と機関を合わせ、写真・図書・書・楽譜・音源・映像等1440点。これとは別に大学史史料室を利用した著書・論文・記事・CD・番組DVD等の研究成果の寄贈が個人、学校、地方自治体、番組制作、映画制作、レコード会社、新聞社等から63点ありました。

利用状況に見る将来像——近現代芸術教育の研究拠点として

当室は国立の機関として国立公文書館等の指定を目指しています。それと同時に、現在の利用状況から、当室に望まれる将来像を読み取ることが重要と考えます。

利用者の4分の3以上が東京音楽学校時代の公文書類や関連する寄贈資料を活用します。東京音楽学校時代の人物、専門教育、演奏等に関する調査が主流ですが、校史にとどまらず、近現代日本の音楽界、あるいは近現代日本を知る手段として大学史史料室が利用されます。初対面の利用者同士が連絡先を交換し合って帰ります。本学の設立経緯からして、当室に近現代芸術教育の研究拠点としての役割が求められるのはむしろ当然とも言えましょう。大学史史料室としては当面、公文書でも寄贈資料でも、自壊の危機迫るアナログ資料のデジタル化とデータ管理を進め、アーカイブ力を強化することで"活用されるアーカイブズ"、"研究成果の上がる大学アーカイブズ"の構築を重要課題にしたいと考えています。

企画展紹介

京大経済学部の新設と河上肇たち

京都大学大学文書館助教 福家 崇洋

2014年11月11日（火）から開催予定の企画展「京大経済学部の新設と河上肇たち」（2015年1月18日（日）まで、於・百周年時計台記念館歴史展示室）を紹介します。

第一次世界大戦から100周年にあたる今年は、ヨーロッパを中心に各地でイベントが開催され、日本でも研究者によって再検証が進められています。

日本における大戦の影響として、よく言及されるのが特需による好景気です。お札に火を付けて靴を探す「成金」老紳士の姿を、日本史の教科書で見たことを憶えている方も居られるかもしれません。

景気がよくなれば、都市部を中心に「優秀」な働き手（ホワイトカラー）が求められます。こうした人材を社会に供給する役割を果たしたのが1918年の大学令でした。

すでに日本政府は、帝国大学増設や高等学校新設によって高等教育を充実させることに取り組んでいましたが、大学令公布によって私立大学や単科大学の新設が認められていきます。また、学部制導入とともに、まずは東京帝国大学で、次に京都帝国大学で経済学部が設けられることになります。

本企画展は、新設期から転機を迎える1920年代までの京大経済学部の軌跡やそこに関わった教官、学生たちの姿を当館所蔵の公文書や写真などを用いながら展示することを目的にしています。「京大経済学部の黎明」「草創期の教官たち」「時代の転換と経済学部」などのコーナーに分けて見ていきます。

最初のコーナー「京大経済学部の黎明」は、法学部から分かれるかたちで生まれた経済学部がどのようにその歩みをスタートさせたのかについて展示を行います。

日清戦争後の産業革命を受けて、京都帝大でも1900年から法科大学政治学科のなかに

経済学関連の講座（経済学・財政学・統計学）が順次設置されていきます。これらの授業を担当したのは帝国大学（のちの東京帝国大学）を卒業した少壮の研究者でした。経済学関連の講座はその後順調に増えていき、1914年に政治学科は政治経済学科と改称します。

経済学部設置の大きな要因になったのが第一次世界大戦後における日本社会の変化でした。早くから経済学の独立が議論されていた東京帝大に対して、京都帝大の方は法科大学から独立しようとする動きはなく、むしろ経済学科の新設が考えられていました。

しかし、1919年の帝国大学令改正を受けて、この動きが学部としての独立へ大きく舵を切っていくことになります。この理由は、京大の方が東大よりも経済学を教える教官数が多いにもかかわらず、学部を設けなければ「経済学ニ志ス学生ヲシテ、京都ニテハ斯学ヲ習得スルノ便宜乏シキモノト誤解セシムルノ虞アリ」というものでした。東大へのライバル心と経済学をまさに京都から発展させたいという教官たちの情熱が垣間見えます。受け容れる学生数も創立当初は1学年100名だったのが、1924年度からは250名とその規模を急速に拡大していきます。

このコーナーでは、誕生から巣立っていく経済学部の軌跡を、同学部から大学文書館に移管された大正期の貴重な公文書を用いて浮かび上がらせたいと考えています。

2つ目のコーナー「草創期の教官たち」は、黎明期の京大経済学部を支えた教官たちにスポットライトを当てています。

先述のように、草創期の経済学部の特徴は、その充実した教官陣でした。なかでも法科時代以来経済学の授業を担当してきた田島錦治、神戸正雄、河上肇は、精力的な調査や提案を繰り返して、経済学部独立に向けて尽力する

ことになります。

草創期の教官の構成は、教授8名、助教授2名、専任職員1名というものでした。経済学第1講座は田島錦治、第2講座は戸田海市、第3講座は神戸正雄、第4講座は河上肇、第5講座は河田嗣郎、第6講座は山本美越乃、財政学講座は小川郷太郎、統計学講座は財部静治がそれぞれ担当します。1922年になると、新たに社会政策講座と経済史講座が設けられ、河田と本庄栄治郎が担当しました。

この教官たちの教育・研究は、次第に経済学部の名声を高め、経済学の新しいメッカと評されるようになります。そのなかでも特に著名だったのが河上肇でした。東京商科大の福田徳三と並んで「河上・福田時代」といい表されるほどの影響力があった彼は、ベストセラー『貧乏物語』の出版、個人雑誌『社会問題研究』の発行、マルクス主義文献の紹介など大きな足跡を残していきます。

このコーナーは、河上肇を中心に経済学部教官たちの姿を、大学文書館に所蔵されている経済学部関係の聴講ノートや写真をもとに紹介します。それに加えて、河上肇による書画などをもあわせて展示することで、大学教官とは異なる文化人としての側面も見ていただければと考えています。



河上肇筆「蓮の花」

3つ目のコーナー「時代の転換と経済学部」は、1920年代後半から1930年前後までの経済学部を映し出しています。

1910年代末から日本では労働争議や小作

争議が頻発し、大規模な米騒動も起こりました。ロシア革命が起こって、日本でも社会主義が青年や労働者の関心をとらえていきました。こうした影響は学内の経済学部にも及び、社会主義学説の紹介に努めていた河上肇の教えを請うため入学してきた学生も多かったと言われています。彼らは社会科学研究会という学生団体に参加し、社会科学の討究を行っていましたが、次第に労働運動や農民運動にも関わり、活動を急進化させていきます。

その矢先に起こったのが1925年の京都学連事件でした。これは「内地」で初めての治安維持法が適用された事件として知られています。同志社大学構内に軍事教育反対のビラが貼られていたことをきっかけに学生たち33名が検束されます。ここには京大社研会員18名も含まれていたことから、経済学部教授有志は声明書を発表し、「研究の自由」の擁護や「前途ある研究中の学生に対して、その取締が誠意ある諒の下に、平静、穏当、適法に行はれん事」を訴えました。

もうひとつの思想弾圧が、いわゆる河上事件でした。三・一五事件（1928年）などで共産主義運動関係者が摘発されるなかで、文部省は社研の解散、「左傾」教授の追放を各大学に求め、京大は社研を解散、河上肇に辞職勧告を行うに至ります。彼は、大学の勧告には従わなかったものの、経済学部教授会の意向を無視できずとして、自ら職を辞しました。

このコーナーでは、主に以上の二つの事件（京都学連事件・河上事件）にスポットライトをあてながら、同時期の経済学部の変転を文書館に所蔵されている資料を用いて展示していきます。

以上、本企画展は主に3つのコーナーから、これまで知られざる公文書や資料などを用いて、京大経済学部の黎明期から転換期までの軌跡を追うこととします。ぜひ皆様のご来場をお待ちしております。

[日誌] (2014年4月～2014年9月)

2014 年

- 4/ 1 井垣隆敏氏より、吉川恭三先生遺品生徒アルバム等寄贈。
- 4/ 1 2013年度に事務本部及び各部局から受け入れた特定歴史公文書等（2685 冊）を公開。
- 4/ 1 西山教授、新採用職員研修において京都大学の歴史について講義。
- 4/ 4 長野県立歴史館より、室賀信夫関係資料に関する照会。
- 4/ 7 安井大輔氏より、『綴葉』寄贈。
- 4/ 7 京都新聞社より、入学式式辞の変遷につき取材。
- 4/ 8 学外より、木下広次関係資料に関する照会。
- 4/ 8 坂口助教、オランダ・アムステルダム自由大学一行に展示案内。
- 4/ 9 西山、フランス大学学長会議（CPU）・工科大学学長会議（CDEFI）視察団に対して、History of Kyoto University と題して講演。
- 4/14 学外より、第三高等学校に関する照会。
- 4/16 学外より、折田彦市に関する照会。
- 4/19 学外より、哲学講座に関する照会。
- 4/21 学内より、熊野寮に関する照会。
- 4/22 木田章義氏より、ガラス板写真、アルバム寄贈。
- 4/22 山内龍男氏より、今村力造先生直筆ノート等寄贈。
- 4/22 長野県立歴史館より、室賀家に関する照会。
- 4/23 大学文書館教員会議。
- 4/28 京都新聞社より、総長選挙制につき取材。
- 4/30 『京都大学大学文書館だより』第 26 号発行。
- 4/30 事務補佐員黒岩美和退職。
- 5/ 1 事務補佐員木元真美雇用。
- 5/ 7 学外より、学徒出陣に関する照会。
- 5/ 8 オフィス・アシスタント吉岡悠紀子雇用。
- 5/10 西山、滋賀県平和祈念館平和学習講座において「「学徒出陣」研究 ―戦時に青春を生きた学生と大学―」と題して講演（6 月 14 日・7 月 12 日も）。
- 5/14 京都府より、歴史展示室に関する照会。
- 5/14 慶應義塾福澤研究センターより、学徒出陣調査報告書に関する調査のため来館。
- 5/21 大学文書館教員会議。
- 5/29 学内より、清風荘に関する照会。
- 5/29 西山、立教学院展示館開館記念シンポジウム「大学の新しい使命と展示活動 ―アカウンタビ

リティと自校教育を中心に―」（於・立教学院）において「京都大学における歴史展示」と題して講演。

- 5/30 西山、東京大学文書館へ出張、資料保存状況を視察。
- 6/ 3 法人文書管理等に関する研修会を開催。
- 6/ 4 西山、FM 京都「Kyoto University Academic Talk」に出演。
- 6/ 5 西山、New Education EXPO 2014（於・東京ファッションタウンビル）において「大学史料を展示・公開する ―アイデンティティと関わる場としての大学アーカイブズの実践」と題して講演。
- 6/ 5 出版文化社より、大学文書館業務視察のため来館。
- 6/ 6 KBS 京都より、京都大学の歴史に関する照会。
- 6/ 9 学内より、胸部疾患研究所に関する照会。
- 6/ 9 西山、全国公文書館長会議、実務担当者による意見交換会に出席。
- 6/13 安藤文平氏より、粉川昭平関係資料寄贈。
- 6/13 ワンビシ・アーカイブズより、大学文書館業務視察のため来館。
- 6/24 朝日新聞より、学徒出陣に関する照会。
- 6/25 大学文書館教員会議。
- 6/25 韓国・明知大学及び学習院大学より、大学文書館業務視察のため来館。
- 6/26 九州大学大学文書館及び総務課より、大学文書館業務視察のため来館。
- 7/ 2 LIXIL ギャラリーより、三高の歴史につき取材のため来館。
- 7/15 溜池良夫氏より、大学紛争期諸資料等寄贈。
- 7/15 西山、あしなが育英会京都インターンシッププログラムにおいて、History of Kyoto University と題して講義。
- 7/22 大学文書館教員会議。
- 7/22 事務本部及び各部局の法人文書の搬入（～8 月 8 日）。
- 7/22 読売テレビより、太陽観測所に関する照会。
- 7/29 香西茂氏より、米軍ビラ寄贈。
- 8/ 4 学内より、石川一に関する照会。
- 8/ 5 企画展「儀式・行事の歴史」開催（於・百周年時計台記念館歴史展示室、～10 月 5 日）。記者レク実施。
- 8/ 6 西山、福岡県立筑紫高等学校生徒に「大学って何をするとところ？」と題して講義。

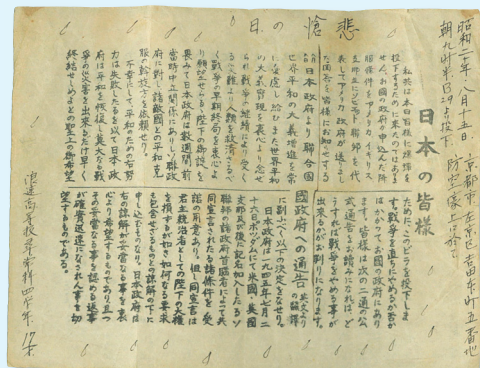
- 8/ 6 読売新聞社より、戦争体験聞き取りにつき取材。
- 8/ 7 オープンキャンパス 2014 開催（～8 日）。
- 8/ 8 東海大学より、現用文書および移管文書の管理につき視察のため来館。
- 8/18 大学文書館教員会議。
- 8/18 NHK より、卒業生に関する照会。
- 8/21 神戸大学附属図書館大学文書資料室より、大学文書館業務・施設等について視察のため来館。
- 8/22 西山、学徒出陣関係者に聞き取り調査（於・東京都大田区）。西山、東京外国語大学大学文書館へ出張、業務・施設等視察。
- 8/25 京都大学医学部附属病院総務課総務掛より、額掛け軸寄贈。
- 9/ 3 河合貴代子氏より、河合十太郎・河合良一郎関係資料寄贈。
- 9/ 3 西山、新採用職員研修において京都大学の歴史について講義。

- 9/ 5 学内より、旧採鉱冶金学科に関する照会。
- 9/ 6 学外より、看守簿に関する照会。
- 9/ 8 福家助教、総務部インターンシップ生に館内の案内。
- 9/18 大学文書館教員会議。
- 9/19 白川書院より、歴史展示室に関する照会。
- 9/22 大学文書館建物工事のため、閲覧室を閉室（24～26 日も）。
- 9/24 篠原迪子氏より、篠原喜久子宛大野博氏書翰寄贈。
- 9/26 大学文書館運営協議会。
- 9/26 京都新聞社より、歴代総長につき取材。
- 9/29 西山、学徒出陣関係者に聞き取り調査（於・東京都大田区）。

大学文書館の動き

「米軍ビラ」をご寄贈いただきました

昨年 4 月発行の『京都大学大学文書館だより』第 24 号に掲載された「三高・京大の「八月十五日」」という文章で、京大寄宿舍の日記中に、1945 年 8 月 15 日早朝米軍が京都市内にビラを撒布した記述があることが紹介されました。この文章を読んだ香西茂名誉教授より、そのビラを大学文書館にご寄贈いただきました（写真）。ビラは、縦 10.7cm、横 14cm という小振りのもので、「日本の皆様」と題されて「私共は本日皆様に爆弾を投下するために来たものではありません」とした上で、ポツダム宣言をめぐる日本と連合国側との文書のやりとりを記載しています。当時、浪速高等学校に在学中だった香西名誉教授は、京大に程近かった自宅そばの防空壕上で、このビラを手に入れたそうです。当館では、閲覧や展示を通じてこの資料を一般に公開します。



人の動き（2014 年 4 月～2014 年 9 月）

2014 年 9 月 30 日 江崎信芳 副学長・理事、大学文書館長を退任。

実現しなくてよかった？ —長期施設計画—

京都大学大学文書館教授 西山 伸

以前から気になっていた新聞記事がある。1964年4月13日付『京都大学新聞』に載っている「『京大長期施設計画』を見て」という記事である。「京大横田事務局長はこのほど京大の「長期施設計画」を明らかにした」で始まるこの記事は、京大構内全域にわたって大幅に建物の新增設を行う計画案を紹介している。

高度経済成長真っ只中のこの時期、各国立大学では施設整備計画が練られていた。理工系を中心とした学生増や、産学協同を推進しようとしていた当時の文教政策に適合するキャンパスプランを作成するよう文部省が求めていたことが、その背景にあった。京大におけるこの案は、4年後の1968年に公表された「長期整備計画試案」につながる。この「長期整備計画試案」が、京大紛争の争点の一つになるわけである。

が、本稿で言いたいのはそのことではない。

大学文書館所蔵資料に『施設整備委員会関係綴』（識別番号01A00611）がある。ここに9枚のキャンパス建物配置図が挟み込まれていて、それらは冒頭の記事に付されている小さな図面とほぼ等しい。おそらく、1964年段階の長期施設計画の図であろう。

その本部構内を見てみると、ほとんどの建物は建て替える計画になっているのが分かる。残るのは、時計台とその北にある法経本館、文学部東館ぐらいいで、その他は土木工学教室、建築学教室、文学部陳列館、さらには現在学務部が入っている旧石油化学教室なども、跡形もなく消えている。ちなみに、旧石

油化学教室の跡地には図書館が建つことになっている。

つまり、現在キャンパスに残る「歴史的建造物」は、時計台を除きほぼ一掃される計画なのであった。それだけでも結構驚きだが、計画について記した冒頭の記事はこう評価する。「旧建造物としては本部時計台のみが残されるという『新大学構想』の実現によって緑の学園が実現するのは全くの『夢』ではなさそうだ」「全計画を一貫している基本構想は従来の赤レンガ造り、木造もしくは平屋建物を撤去、ほぼ鉄筋コンクリート四階建のいわゆる「合同庁舎」方式の採用であろう」と。

非常に大がかりなこの計画が、どこまで現実的であったかは分からない。結局大学紛争の勃発や高度成長の終焉によって実現することはなかったが、それでも例えば工学部8号館（現在の総合研究8号館）のように、この計画通りの建物もないわけではない。

現在の価値観で過去を切り捨てることは、厳に戒められなくてはならない。しかし、それと同様に、その時代特有の価値観ですべて物事を決めてしまうことも避けるべきだろう。現在の京大キャンパスは、雑然としているものの、1880年代から現代までの建物が並び、しかもそれが実用に供されているという、「生きた博物館」の様相を呈している。それは、大学が歩んできた歴史をかすかながらでも実感させてくれる効果を持つ。高度経済成長期の価値観で歴史の証人を、いわば切り捨てようとしたあの「長期施設計画」は、やはり実現しなくてよかったのではなかろうか。